

# SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS No. 161 November 2020

## 研究の最前線

◆ 2020 年度夏期国際シンポジウム  
《北東アジア——歴史と未来・発展と摩擦》開催される ◆

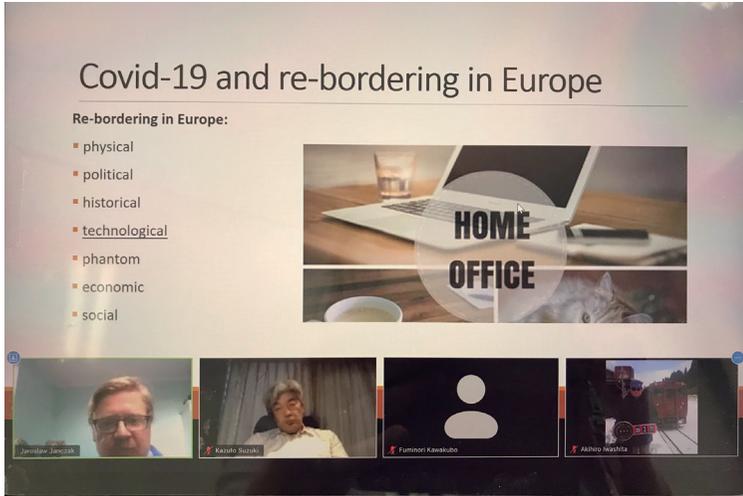


ZOOM シンポジウムの様子

スラブ・ユーラシア研究センターは、7月2日（木）・3日（金）に、夏期国際シンポジウム“Northeast Asia: Pitfalls and Prospects, Past and Present”を開催しました。新型コロナウイルス感染症対策のため、全編オンライン会議（ZOOM）で実施するという初の試みでした。本シンポジウムの前半（第1、第2セッション）は、2016年度に開始した人間文化研究機

構基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究推進事業」の北大拠点メンバーによる成果を海外の研究者と議論する機会であり、後半（第3および第4セッション）は科研費基盤研究（A）「戦後北東アジアにおける歴史的分岐点のマルチアーカイブ分析」（代表：ディビッド・ウルフ）のメンバーによる議論と聴講者との意見交換の場でありました。

米国や中国の戦略的関心がアジアの南方、インド・太平洋地域に移りつつある状況のなかで、冷戦終結後も地域制度が育たなかった「北東アジア」という地域概念に、新たな角度から光を当てることが第1、第2セッションの共通の課題でした。第1セッション「地域協力のボトルネック」は2つのパートに分かれ、パート1では地域特有の主権問題というハードなボトルネックと、日韓の「不信の政治」の問題が外交関係だけでなく雇用不安や貧困という社会内部の問題に根差しているという「ソフトなボトルネック」の問題を議論しました。パート2では、北東アジアという地域概念について、国家間の境界地域やボーダーの観点から再



### ポーランドからの Covid19 に関する特別講義

ス試験紙であることなどが指摘されました。第2セッション「地域の困難を再考する」では、日韓の漁場紛争の実態、トランプ政権下の北朝鮮政策における新旧の危機、中ロ接近の試験場であるロシア極東（アムール州、ユダヤ自治州）での中国の土地取引問題から、国家間関係の実態に迫りました。シンポジウム初日の最後に、ポーランドの研究者が COVID-19 によって生じた EU の分断について特別講演を行い、北東アジアの状況と比較する議論が交わされました。

セッション3・4は冷戦期の日本について世界の先端を行く研究の成果を議論する場となりました。1999年に情報公開法が公布され、2001年に施行されて以降、多くの関連文書が連綿と機密指定を解かれてきました。情報公開は、この2セッションの報告者たちを含む研究者たちによる機密指定解除請求によってさらに推進されています。こうした努力が冷戦期の、特に北東アジア及び太平洋地域における日本の役割をアーカイブ資料に基づいて再考する試みを可能にしたのです。セッション3・4のペーパーはいずれも日本のアーカイブ資料を利用し、アメリカ・中国・韓国・ロシアの資料も同時に用いるものでした。日本の文書に色濃く反映している「日本からの視点」のいくつかは、現在の冷戦史叙述を変え得るほどのインパクトを有しています。俎上に載ったトピックの例としては、日本の自主外交に対する意識の高まりと実践、日本の——これまで考えられてきた以上に積極的な——イニシアティブ、政治家の「達成」の裏にあった政府官僚の主導的役割、第二次世界大戦後のアメリカ・中国・ロシア・韓国との国交回復などが挙げられます。この種の主要な問題系はいずれも地域に根差したものであり、和田春樹（東京大学名誉教授）の提唱した「東北アジア共同の家」にも通じるものがあります。

参加者は2日間で延べ160人にのぼり、ZOOM会議の利点として、国内外の様々な地域から御参加をいただくことができました。北東アジアのかたちと大きさ、過去と未来をよりうまく描こうとする我々の試みを可能にくださった御協力者の皆様に、この場を借りて今一度深く御礼申し上げます。[岩下/ウルフ/加藤/諫早]

※ 編集部注：今年度は冬期シンポジウムは開催しません。

検討し、競合する外部アクター（米、ロ）の存在によってこの地域はヨーロッパ、中央アジア、東南アジアとのリンクが強い「開かれたエリア」であり、海域での主権争いの先鋭化によって「島」の意義が再確認されつつあること、そして境界地域は国家間対立と協調の振り子の中で、「壁」にも「ゲートウェイ」にもなるリトマ

◆ 専任研究員セミナー ◆

ニュース前号以降、専任研究員セミナーが以下のように開催されました。

9月13日：田畑伸一郎「第2章 マクロ経済・産業構造」

コメンテータ：金野雄五（みずほ総合研究所）

今回のペーパーは、岩崎一郎他編『現代ロシア経済論・第2版』（ミネルヴァ書房）に掲載予定の原稿で、現在のロシアの産業構造を石油・ガス依存と製造業の弱さという視点から説明を試みるものでした。ここではロシアの経済構造が国際競争力を有するエネルギー部門と競争力のない製造業部門からなる二重経済であることが確認された上で、今後の課題として石油・ガス依存からの脱却と経済の多様化、特に製造業の発展が必要であることが提起されています。コメンテーターの金野氏は「輸入代替」を議論の軸として、ロシアの経済政策における輸入代替の位置づけ、欧米の制裁との関係、輸入代替と油価との因果関係などについての議論を提起し、合わせて本書が学生向けの教科書であることを踏まえたコメントがなされました。フロアからは、投資対象としてのロシア、ロシアの特殊性を超える議論の可能性、製造業以外の産業（特に農業）の可能性、ロシアの現在の経済構造をもたらした「オランダ病」以外の要因、経済と政治の関係、ロシア経済の東方シフトの主体、などさまざまな論点からの議論が提起されました。なお今回は初めて一部オンラインでの専任研究員セミナーとなりましたが（オンライン参加は9名、会場参加は5名）、4月以降の経験の積み重ねもあり、大きな問題なく運営することができました。[仙石]

10月9日：仙石学「深まる亀裂？：法と正義の政治がもたらしたもの」

コメンテータ：中井遼（北九州市立大学）

提出されたペーパーは、作成中のスラブ・ユーラシア研究報告集『転換期のポピュリズム？』に掲載予定の原稿ということでした。ポーランドでは、2019年5月に欧州議会選挙、10月に議会選挙、2020年6～7月に大統領選挙が実施され、いずれの選挙においても与党の「法と正義」が勝利しましたが、これをどのように理解すべきか検討するというのがペーパーの目的とされていました。野党勢力も盛り返していることから、ポーランド社会の亀裂や分断が深まったとする見方について、様々なコメントが出ました。投票率が高くなったのはなぜか、与党・野党ともに得票数が増えているのはどう見るべきか、選挙結果には選挙制度がどの程度影響しているのかなどの質問が出されました。さらに、ハンガリーや日本と比較したらどうか、亀裂や分断といった言葉が適切であるかといった議論もなされました。[田畑]

11月6日：岩下明裕“Abe’s Foreign Policy Fiasco on the Northern Territories Issue: Breaking with the Past and the National Movement”

コメンテータ：袴田茂樹（青山学院大学名誉教授）

提出ペーパーは、2019年末に刊行された *Eurasia Border Review* (Vol. 10, No.1) に Special Section on Russo-Chinese Relations and Northeast Asia の論文の1つとして掲載されたものでした。まだ安倍政権が続いていたときに出版されたものですが、北方領土問題に関わる安倍外交の失敗を鋭く分析したもので、本人としては特にアメリカなどの日本学者 (Japanologist) に読ませるものとして執筆したということでした。北方領土問題の論客としては日本を代表するような2人が報告者と討論者になったので、1992年のコズィレフ・クナーゼ非公式提案や1993年の東京宣言の位置付け、2005年頃のプーチンの変化などについて、突っ込んだ意見交換がなされました。さらに、官邸主導外交の背景やその問題、領土問題に対するトランプ政権や中国の影響、菅政権の外交政策など、幅広く多くの質問が出ました。[田畑]

## ◆ 研究会活動 ◆

- ニュース 160 号以降、センターでおこなわれた諸研究会活動は以下の通りです。[大須賀]
- 7月20日 中村・鈴川基金奨励研究員セミナー 五月女颯（東京大・院）「二人の怠け者：I. チャヴァヴァゼ『彼は人か?!』とゴンチャロフ『オブローモフ』の比較研究」(Zoomによるオンライン)
  - 9月3日 客員研究員セミナー 河村彩（東京工業大）「複製技術時代のグラフィック：1930年代のリシツキーを中心に」(Zoomによるオンライン)
  - 9月23日 「ロシア・旧ソ連文化におけるメロドラマ的想像力の総合的研究」第1回研究報告会 安達大輔（センター）「1830-40年代ロシアのメロドラマ研究のために」；番場俊（新潟大）「メロドラマと記号の問題」(Zoomによるオンライン)
  - 9月24日 第34回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会 野町素己（センター）「18世紀セルビアの言語問題再考：掌院イオアン『スラブ民族史』とその言葉を中心に」(Zoomによるオンライン)
  - 10月3日 公募プロジェクト型共同研究『「14世紀の危機」に関する文理協働研究：北東アジア地域を突破口として』キックオフ・ワークショップ 諫早庸一（センター）『「14世紀の危機」研究の現在』；宇野伸浩（広島修道大）「南宋における大災害発生件数と東アジア夏季平均気温との関係」；原田央（東京大）「人間活動に対する気候リスクの指標化及び近代以前のヨーロッパへの適用」(Zoomによるオンライン)
  - 11月5日 北海道スラブ研究会 貞包和寛（東海大）「ポーランドの政策とシロンスク問題：多元主義政策によるマイノリティの疎外」(Zoomによるオンライン)

## 人事の動き

### ◆ 青島陽子さんの着任 ◆



青島陽子さんが10月1日付で准教授として着任されました。青島さんは、1997年に東京大学文学部歴史文化学科を卒業されたのち、同大学院人文社会系研究科に進学されました。大学院博士課程を単位取得退学後、2010年博士（文学）を取得。センターとは馴染みも深く、21世紀COEプログラムを実施していたおり、博士研究員、非常勤研究員として多くの事業に携わっておられ、その後、愛知大学、神戸大学で教鞭をとられておりました。また、2000-2001年にはロシア、2010-2011年には米国への留学経験があります。

専門はロシア帝国の歴史ですが、なかでも教育や文化の問題に造詣が深く、近年はロシア社会について様々な議論を展開されています。とくに統治構造に関わる問題に詳しく、民族政策や境界領域に着目してご研究を積み重ねられています。センターでは、現代も含むロシアそのものと向き合ったスケールの大きな研究成果が生まれることを期待されています。青島

さんの着任により、これまでとは一味違った雰囲気のスラブ研が生まれるのではないかと楽しみです。[岩下]

### ◆ 研究員の異動 ◆

李 宏暉 学術研究員 2020年6月30日採用  
松下 隆志 非常勤研究員 2020年9月30日退職  
中澤 拓哉 非常勤研究員 2020年10月1日採用

[事務係]

## 平穏さに触れた4カ月

ヘンナディー・コロリョフ（ウクライナ国立科学アカデミー歴史研究所／  
センター 2019年度特任教員）

正直に述べると、北海道大学での研究活動はここ数年私にとって夢であった。2018年秋に私が外国人研究員の申請をしたスラブ・ユーラシア研究センターは、世界中のスラブ研究者、歴史学者、文献学者の間で高い学問的評価を得ている。スラブの地域研究・歴史研究においてアジア全体で最も優れた研究機関の一つだと言って過言ではない。研究員の資格を得たという審査の連絡をいただいたときはとてもうれしかった。

2019年春に私はちょうど10年もの大きなプロジェクトを終えたところで、単著の出版を急いで準備しながら、新しい研究計画について考えていた。それと同時にある自信がわいてきた。札幌に行けば、どのように私の研究を「新しい方向へ向ける」べきなのか、理解できるだろうと思ったのだ。手短かに言えば実際その通りのことが起き、私は札幌から戻った時には、「戦争



と革命」の時代における暴力（1914年-1923年）、そして中東欧における民族自治思想のもつれた歴史（1903年-1926年）という新しい研究テーマに取りかかり始めていた。確かに札幌での研究はとても実りあるものだった。東京での学会や札幌での冬期シンポジウムに参加し、センターで公開講義をするなど、たくさんのことができた。またいくつかの論文や将来の本の草稿を準備した。しかしながらこのエッセイでは、私にとって永遠の思い出となることを点描していきたい。

北大のイチヨウ並木が見ごろなころに



紅葉が見ごろな頃に

「日出ずる国」への旅は昨年の8月末に始まり、私は家族と共にその地へ飛んでいった。新千歳空港では私の研究滞在中の助言者となる宇山智彦教授に迎えられた。札幌駅まで電車で移動しているとき、教授は日常生活の要点やニュアンスについて全て教えてくれた。駅に着くと、私たちは共同住宅へと向かったが、それは大学キャンパスの一角にあり、外国人研究者のためのものだった。この建物は山々のふもとに、

そして大学の農場の隣に位置していた。空気、眺望、人々、そして全てのもが私の眼を楽しませた。

翌日、私は区役所で滞在登録をした。最初の週はウクライナの地理についての学位論文を準備している、センターの博士後期課程院生の寺岡郁夫氏がたくさん助けてくれた。私たちは



同じ時期に滞在していた特任教員と

はなぜかすぐに友達のような関係になれたと思うし、その後も連絡を取り合い続けた。彼は私の札幌の生活での多くの問題についてとても頻繁にアドバイスをしてくれた。

札幌に着いた次の日、私は北海道大学のキャンパスの美しさを見た。全てが大学のシンボルカラーである深緑色に包まれていた。10月になるとイチョウ並木の通りで大学キャンパスはさらに美しくなった。黄葉の豊かな色合いと日本人の好意的な笑みが今でも私の眼に浮かぶ。

センターでは個室のオフィスと素晴らしい作業環境を与えられた。私は今まで多くのフェローシップを得、ヨーロッパの様々な大学で教えてきたが、札幌での研究環境は最良のものであった。ところで私はセンターの見事な、実用的で現代的な図書室を思い出している。大きな感謝をもって、そこで働いていた方々を覚えている。図書室で私は、ジョージ・シェ

ヴェロフとジョージ・ヴェルナツキーの個人コレクションからの書籍や資料を使って研究をしていた。これらの文献は北海道でのスラブ研究の発展のために、大学によって特別に入手されたものだった。

それでもやはり、私は札幌とその景色についての内容に戻っていくことにする。家族と私は地元の動物園、札幌オリンピックミュージアム、



北大事務局の前で

、北海道博物館、北海道立近代美術館を訪れた。子どもの頃からスポーツの歴史に常に興味を持っていた私にとって、オリンピックミュージアムを訪れることは札幌での滞在中の重要な使命の一つであり、何度も訪れた。壮大な真駒内公園はいくつかの部分に分けられている。スポーツ競技を行う場所、アイスアリーナ、スタジアム、そしてふれあいや情報提供のための場所である。大倉山（かつてのオリンピックのスキージャンプ台）へ登ったことは、一生残る多くの感銘をもたらした。札幌が東京五輪に備えていた様子も思い出す。ショッピングモールで夏季五輪のシンボルや土産品を購入することができ、多くの人が五輪のシンボルのある衣服を着ていた。新型コロナウイルスの世界的な大流行によってこのスポーツ、平和、美の素晴らしい祭典を延期せざるをえなくなったことは残念である。

長い間、羊ヶ丘展望台は私の記憶に残るだろう。その名前は羊の飼育をする場所に由来している。また北海道大学の創設者であるウィリアム・クラーク博士の像もある。このアメリカ人農学者は最初に農学校を創設し、それが後に大学となった。この場所から札幌市全体の壮大な景色を鳥瞰できる。

11月と12月の札幌での時間はとても快適で平穏なものだった。私の家族は大通公園を歩いている。特に休日のイベントのときは、笑いだけがこぼれた。私の妻は「白い恋人」チョコレート工場を、見事な英国式の公園と甘いクッキーとともに今もなお思い出している。この工場は有名な北海道のクッキーを生産している。私たちはそこを何回か訪れたが、特に12月と夕暮れ時が雰囲気を出していた。

まとめると、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターでの研究滞在は私の研究者人生において最も実りある段階だったと位置付けている。北海道の美しさ、札幌の親切さ、そしてセンターでの素晴らしい仕事環境は永遠に私の記憶に残っていく。私は微笑みながらセンターでの同僚たちを思い出す。彼らは優しく誠実で、親身に応答してくれる。そして私は静かな気持ちになる。ありがとう、北海道。

(英語から寺岡郁夫訳、宇山監修)

## 環境と社会のあいだ：ワークショップ「前近代ユーラシア東西における気候変動と社会」報告記

諫早庸一（センター）

10月3日土曜日、ワークショップ「前近代ユーラシア東西における気候変動と社会」が開催された。これは、スラブ・ユーラシア地域を中心とした総合的研究（プロジェクト型）『14世紀の危機』に関する文理協働研究——北東アジア地域を突破口として』（代表：中塚武 名古屋大学大学院環境学研究科）のキックオフ・イベントである。以下、当プロジェクトの所内アドバイザーを務める諫早庸一が報告を記させていただく。プログラムは以下の通りであった。

~~~~~

2020年10月3日（土）15時～18時（Zoom 開催）

「前近代ユーラシア東西における気候変動と社会」

15:00～15:20

諫早庸一（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）

『14世紀の危機』研究の現在」

15:20～16:10

宇野伸浩（広島修道大学国際コミュニティ学部）

「南宋における大災害発生件数と東アジア夏季平均気温との関係」

コメント：梅村尚樹（北海道大学文学研究科）

16:10～17:00

原田央（東京大学院工学系研究科卒）

「人間活動に対する気候リスクの指標化及び近代以前のヨーロッパへの適用」

コメント：中塚武（名古屋大学環境学研究科）

17:10～18:00

全体討論

~~~~~

まずは諫早がプロジェクトと「14世紀の危機」の研究についての簡単なまとめを行った。この共同プロジェクトの概要を説明した後に、「14世紀の危機」というタームが元来は西洋史由来のものであったことに触れ、そしてその議論をユーラシア規模に開いた近年の重要な研究としてイングランド中世経済史家のブルース・キャンベルによる『大遷移（The Great Transition）』を紹介した。キャンベルは「大遷移」を、1270年代から1470年代の200年あまりをかけて推移したユーラシア史の大規模変動の総称とし、その展開は「中世温暖期（Medieval Climatic Anomaly）」から「小氷期（Little Ice Age）」への移行に起因する地球規模の気候変動とそれに対峙した社会との相互作用の連なりから成ると考えている。キャンベルは通常「危機（crisis）」と称されてきた14世紀中盤を、より大きな「遷移」のなかにある不可逆的な「転換点（tipping point）」と見做すべきとしている。このように西洋史の視点をユーラシア規模に開いた同書はしかし、西洋史の視点からこの時代のユーラシアを見ることによって生じるバイアスを克服できていない。そこにこのプロジェクトの副題が主張する「北東アジア地域を突破口として」の意義があるのである。

こうした導入に続いて、宇野伸浩氏の報告となった。この報告は、題目の通り南宋（1127～1279年）に焦点を当てるものであった。もちろんこの王朝はその滅亡年代すらも「14世紀」に届かないものではあるものの、まずは方法論の模索として、史料状況と研究状況とが一步

進んでいる南宋を取り上げ、古気候学データと歴史学の史料をいかに組み合わせるかを有効であるかについて検討を試みるのがこの報告の主旨であった。宇野氏が扱った研究プログラム PAGES 2k network による東アジアの夏季平均気温という新しいデータに基づけば、これまで寒冷期とされてきた南宋前期（1127～1200年）のなかでも12世紀の半ばは、一気に気温が上がり気温の乱高下が始まる時期にあたる。宇野報告においては、このデータがどの程度南宋の事例に対応するかを確認すべく、12～13世紀の南宋の夏季の災害発生件数と、このデータとの対応関係を見ていった。南宋に関してはすでに斯波義信氏による災害研究があり、そこでは南宋の全期間の水害・旱害・飢饉の情報が、『宋史』『五行志』などから抽出されている。東アジア夏季平均気温に並行するのは水害の発生件数の方で、気温の上昇より少し遅れて水害の発生件数がピークに達している。宇野氏が次に見るのが、近年環境史研究のキーワードの1つともなっているレジリエンス（resilience: 対応力、復旧力）、具体的には漢陽軍（現在は武漢市の一部、長江の北側）における飢饉対策の事例である。それは当時世界で最も貨幣経済と流通経済が発達した地域における、地方長官黄榦による完璧な災害飢饉対策（1213～14年）の実例であった。東アジア夏季平均気温の推移と、南宋における旱害・水害の発生件数の推移の間にはある程度の相関関係が見えることから、古気候学のデータを活用することは新しい研究につながる可能性が高いとして宇野氏は報告をまとめている。

「前近代ユーラシア東西における気候変動と社会」ポスター

この報告に対するコメントが宋代の思想史・社会史を専門とする梅村尚樹氏から為された。梅村氏が注目したのは、斯波氏の研究が水害・旱害・飢饉の件数を抽出するのに用いた『宋史』『五行志』の史料性である。その記述には年代的・地域的な濃淡が明らかに存在している。梅

「スラブ・ユーラシア地域を中心とした総合的研究」(プロジェクト型)  
「14世紀の危機」に関する文理協働研究——北東アジア地域を突破口として——  
主催：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター

Zoom 開催

キックオフ・ワークショップ

# 前近代ユーラシア 東西における 気候変動と社会

プログラム

諫早庸一（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）

「14世紀の危機」研究の現在」

宇野伸浩（広島修道大学国際コミュニティ学部）

「南宋における大災害発生件数と東アジア夏季平均気温との関係」

コメント：梅村尚樹（北海道大学文学研究科）

原田央（東京大学院工学系研究科卒）

「人間活動に対する気候リスクの指標化及び近代以前のヨーロッパへの適用」

コメント：中塚武（名古屋大学環境学研究科）

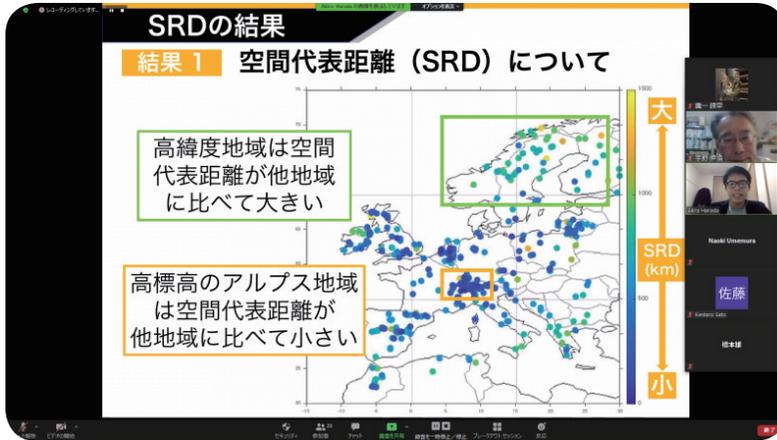
全体討論

写真撮影：四日市康博

2020年10月3日(土)15時～18時 (Zoom 開催)

参加ご希望の方は、9月25日(金)正午までに  
諫早庸一 (yoichi.isahaya@slav.hokudai.ac.jp) へご連絡下さい。  
追って Zoom URL を通知させていただきます。

yoichi.isahaya  
@slav.hokudai.ac.jp



原田報告

らのデータ抽出には必要であるとのコメントであった。

歴史学系の報告の後は土木工学系の修士課程を修了した原田央氏による、自身の修士論文（古市賞受賞）に基づいた報告であった。歴史学者が大勢を占めるオーディエンスのなかにあつて原田氏はまずはプロキシと呼ばれる環境データの説明から入り、それに基づく環境史研究の問題点を3つ挙げた。それがまずは空間代表性、つまり必ずしもピンポイントに環境データが求められない現状にあつて、それによる気候再現がどこまでの地域の気候を再現したものなのかを考えなければいけないということ。2つ目は年輪などのプロキシ・データの個体差の問題。同じ地域においてももちろん樹木等々には個体差があり、その差異を考慮してできるだけ量的に厚みのあるデータを用いる必要があるという指摘。3つ目が気候と社会とを直接比較することの危険性である。気候というのは本来、気候・農業・災害・文化・政治といった複合要素のなかで社会に影響を与えるものとなる。プロキシ・データと社会変動とを直接結びつけることはできないのである。こうした問題点を踏まえて提示されるのが、プロキシ・データに基づく定量的かつ段階的な分析手法ということになる。この手法が実践される地域が——豊富なデータを得られる——ヨーロッパである。原田氏はこの地域において得られるプロキシ・データを基に、まずは空間代表性を表現すべく「空間代表距離（Spatial Representative Distance）」（以下、SRD）なる指標を提案する。これは、あるプロキシ・データがどこまでの空間的範囲の気候を表現できるかを距離で表したものだ。さらに具体的な気候の社会への影響について中塚氏が提唱する「数十年周期変動」仮説、つまり20年から70年ほどの周期の気候変動がもっとも人間社会にとって対応の難しい周期であるとする仮説に依拠して議論を進める。この周期性の析出のために原田氏が用いるのが短時間フーリエ変換と呼ばれるものである。これによってどの年代においてどの周期が顕在化しているのかを検出することができる。この2つを組み合わせると環境リスクを数値化したものが、これも原田氏が提案する「気候影響因子（Climate Impact Factor）」（以下、CIF）である。既述の通り、気候と社会との間にはいくつもの要素があり、そうした諸要素を考慮しない限り、気候変動が人間社会の及ぼした影響を計ることはできない。社会の影響の数量化のために用いられたのは、ヨーロッパにおける小麦価格や戦乱のリストであった。考察の結果として、CIFについては穀物価格との相関性が見られることが特にロンドンとパリを対象にした考察（1400～1700年）によって明らかにされた。原田氏の構築モデルによる穀物生産と人口動態の復元では、飢饉が起つた1421年パリにおいて実際にリスク指標が高まっていたことが読み取れる。気候と社会との関係性を定量的に議論する枠組みを提示する報告であった。

村氏は、その主要典拠が『文献通考』にあること、そしてそれは南宋期の途中である1223年までで終わっていることを指摘する。そもそも『文献通考』の情報源は何であったのか、23年以降の記述が何に拠っているのか、そうした史料考証が文献か

この原田報告に対するコメントをプロジェクト・リーダーの中塚武氏が行った。まず中塚氏は、この原田氏の工学的データ解析が、古気候学の環境データと歴史学の文献データをつなぐものであるという、原田報告の位置づけの確認を行った。そうした上で、古気候学の立場から見たコメントとして、プロキシ・データの性質——原田報告が用いたのは、個体差はすでに織り込み済みのマスター・クロノロジーであることなど——について指摘を行った。CIFについても興味深い相関がみられているものの、穀物生産量だけを考えるのであればむしろ気温や降水量自体の方が直接関係があることが知られており、CIFをより活かすためには、そうしたデータとの関係性も含めて論じていく必要があるのではないかとコメントした。

休憩時間を挟んで、報告者によるリプライの後に、議論がフロアに開かれた。まずは日本も含めた東アジアとして気候を一括りにできるのかという意見。これに関しては日本と江南地方には夏季降水量に関しては相関関係があり、かつ江南（南東部）と華北（北西部）に関しては逆相関が見られるとの説明があった。それを受けて、例えば多雨傾向が見られる同時期の江南と日本を比べれば、その時期における災害の有無・多寡など双方の治水技術に関わる部分でレジリエンスの差異が見えるのではないかと意見もあった。原田報告に対しては、穀物価格に関して対象とした17世紀はそもそも価格革命と呼ばれる物価上昇の時期で、その種の圧倒的な社会因子も考慮に入れる必要があるという指摘が出た。また、これまで17世紀の全般的危機について語られてきた気候データとは必ずしも一致しないデータが提示されているがこの相違が何に基づくのかという質問に対しては、例えば年輪に関して従来やり方だと長期に亘る変動を再現できないところもあり、それは現行の手法で是正傾向にあるとの回答があった。文献データと環境データを混ぜて立論することにも議題は及び、そうしたところの危険性が明らかである一方で、特に中国においては文献や物質データからの環境史研究も大いに進展しており、こうした研究成果も踏まえるべきとの意見も出た。

環境データの解像度が上がり、特に前近代史について文献資料の空白を埋める役割をも期待される昨今であるが、今回のワークショップはそうしたデータが物語る環境と文献データが明らかにする社会とのあいだを計り、それを埋めていく試みとなったように感じられた。ワークショップを様々な形で御支援下さった全ての方々に感謝申し上げます。当プロジェクトの次回以降のイベントにも御期待下さい。

## 人民の要求か、裏切られた革命か： クルグズスタン（キルギス）の2020年政変

宇山智彦（センター）

2020年10月、中央アジアのクルグズスタンでは2005年と2010年に続き、大衆的な抗議行動による3度目の政権崩壊が起きた<sup>1)</sup>。しかしその経緯や対立構図は、前の2回以上に分かりにくいものとなっている。今後どのような政治体制になっていくのか、決着はまだつかないが、10月30日までの状況の要点を簡単にまとめておきたい。なお、主な情報源はAKIpressやRadio Azattykなどのインターネット・メディアだが、煩雑を避けるため逐一注を付けることはしない。

1 2005年と2010年の政変（革命）については、それぞれ以下を参照。宇山智彦「クルグズスタン（キルギス）の革命：エリートの離合集散と社会ネットワークの動員」『「民主化革命」とは何だったのか：ゲルジア、ウクライナ、クルグズスタン』北海道大学スラブ研究センター、2006年、41-77頁；同「クルグズスタン（キルギス）の再チャレンジ革命：民主化・暴力・外圧」北海道大学スラブ研究センターウェブサイト、2010年4月20日掲載、1-10頁。

## 1. ジェーンベコフ政権の弱点と国会選挙に向けての動き

2010年の革命後、移行期を経て、2011年に大統領に就任したアルmazベク・アタムバエフは、大統領の再選を禁じる憲法の規定を守ると共に、自分の影響力を保とうとして、2017年10月の大統領選挙に古くからの部下ソーロンバイ・ジェーンベコフを擁立し、当選させた。しかし大統領に就任したジェーンベコフは、自分を取り立てつつも馬鹿にする態度を取っていたアタムバエフと激しく対立し、アタムバエフは2019年8月に自宅での銃撃戦の末逮捕・投獄された。

2010年以降のクルグズスタンの国会では5つか6つの政党が議席を分け合い、単独で過半数を占める政党はなかったが、アタムバエフは社会民主党を相対的に強い政党に育て、比較的安定した基盤としていた。ジェーンベコフも同党の出身だが、新旧大統領の対立により党は分裂し、彼はその状態を放置した。それでも国会の議員・政党の大部分はジェーンベコフ



大統領府・議会庁舎（2016年5月撮影）。高いフェンスで囲まれているが、政変のたびに群衆に侵入された。フェンスの大部分は2020年11月に撤去された

を程度の差はあれ支持していたが、明確に大統領の党と呼べる政党がないことによる権力基盤の弱さは否定できなかった。

2020年10月の国会選挙に向けて大幅な政党再編が行われ、ビルムディク党とメケニム・クルグズスタン党が大統領派政党として台頭した。前者は大統領の弟を有力メンバーとし、ユーラシア主義を掲げたが、親ロシア的でソ連ノスタルジーに訴える姿勢（これ自体はかなり多くの国民に共有されている）があまりにも強く、主権を軽視しているという批判を受けることがあった。後者は多民族国家としてのクルグズスタンの団結を重視する姿勢だったが、政策的な主張よりも、腐敗した元税関幹部ライム・マトライモフが、兄の国会議員を通じて影響力を持つ党というイメージが注目された。両党は共に大統領を支持しつつも競合関係にあり、地方では支持者間の暴力的な衝突もあった（2005年革命前の選挙で、親アカエフ派同士の間に対立があったことを想起させる）。また、従来から有力な政党だったクルグズスタン党も親大統領の立場を取ったが、財源の裏付けなしにバラマキを約束する安直な公約が目立った。

選挙運動の過程では票の買収の噂が絶えず、特に、住民登録されているのとは別の地域で投票できるという、本来は転居した人のための制度が大規模に悪用されていると言われている

た。クルグズスタンの国会選挙は全国区制の拘束名簿式比例代表制だが、各党は候補者に事実上選挙区を割り当て、得票の少なかった者には議員就任を辞退させるという方針を採っている。候補者が自分に投票してくれる人を他地域から金で集めていると見られている。

## 2. 選挙後の突然の権力崩壊と混乱

買収などの疑惑があったとはいえ、10月4日の投票日までは特に大規模な抗議行動はなく、基本的に静かだった。投票の結果、7%の足切りラインを上回って議席を得られるのは、親大統領派の上記3党と、反対派のプトゥン・クルグズスタン党（2010年と15年の選挙では議席を得られず、今回初めて足切りラインをわずかに上回った）だけであることがその日のうちに確実となった。するとそれ以外の党から次々と開票結果を疑問視する声が挙がり、情勢は一気に流動化した。

10月5日、プトゥン・クルグズスタン党を含む12党が選挙結果を認めないという声明を出し、抗議集会を開いた。治安部隊は集会を解散させようとしたが、夜に衝突が起き、6日未明、治安部隊が退却する中、群衆の一部が大統領府・議会庁舎に侵入し、大統領と内相らが逃亡した。群衆の構成・指揮系統の詳細や、治安部隊が退却した理由は十分明らかになっていない。アタムバエフやサドゥル・ジャパロフ元議員など、投獄されていた政治家たちの支持者は刑務所・拘置所に行き、彼らを解放した。

6日の昼には早くも、中央選挙管理委員会が選挙の無効化を決定した。突然権力が崩壊し、さまざまな人が諸機関の長や地方の首長を自称する混乱した状況の中、反対派政党の大部分は調整会議を設立して臨時の権力の中心となろうとしたが、ジャパロフ派（政党としてはメケンチル党）はこれを批判し、大統領を追放すべきではないと述べた。ジャパロフ派は、彼の無罪を訴える運動をたびたび展開していて動員力・結束力が強く、持続的に集会を開けたことが、この後の成りゆきに大きな影響を与えた。

国会の改選前の議員たちは6日夕方にホテルで臨時会議を開き、ジャパロフを首相に指名したが、20人余りしか集まっておらず、明らかに定足数を満たしていなかった。7日夜にも非公開の会合を開いたが、やはり定足数を満たさず、ジェーンベコフを弾劾するかどうかでも意見が割れた。

ジェーンベコフは数日間姿を現さないまま、文書やビデオで声明を出していたが<sup>(2)</sup>、9日に巻き返しに乗り出し、首都ビシケクに非常事態令を發布して、集会の禁止、マスメディアのコントロール、軍の導入を命令し、自ら参謀本部を訪問した。10日にはアタムバエフやその関係者らが次々と拘束された。

## 3. ジャパロフ首相就任、ジェーンベコフ辞任と国会再選挙をめぐる混迷

10月10日に国会が改めて臨時会議を開いてジャパロフを首相に指名すると共に、ほとんどの閣僚の続投を決めたが、出席者は以前より増えていたものの、やはり定足数を満たしていなかったことが判明した。13日にジェーンベコフは首相指名をいったん国会に差し戻し（ただしジャパロフが首相になるのは既定路線というニュアンス）、14日に国会はジャパロフを再び首相に任命すると共に、10日のものとはかなり異なる閣僚名簿を承認した。ジェーンベコフもすぐにジャパロフを首相に任命する署名をした。

任期が間もなく切れる国会も、そこで指名された首相も、正統性に疑問があるため、13日頃には大統領派と反大統領派の双方から、ジェーンベコフは再選挙で新しい国会が成立するまで辞任せず、合法権力の中心であり続けるべきだという声が相次いだ。しかしジャパロフ派の集会は強硬に辞任を求め、正式に首相となったジャパロフも14日に「全クルグズスタン

2 6日のビデオでは、怯えたようなこわばった表情が印象的だった。  
<https://www.youtube.com/watch?v=wVtY50fOtYc>

人が大統領辞任を望んでいる」と発言し、3時間以上にわたってジェーンベコフと交渉したが、結論は出なかった。非常事態宣言にもかかわらずジャパロフ派の集会が続いていたことは、治安機関の無力さ（または、ジェーンベコフが治安機関を完全に掌握できていないこと）を露呈させた。15日、再交渉の結果、ジェーンベコフはついに辞任を表明した。大統領代行は、本来は13日に国会議長に選出されたカナト・イサエフ（クルグズスタン党）になるはずだったが、彼は辞退し、ジャパロフが首相と大統領代行を兼ねた。

開票後の抗議行動がそもそも要求していたところの国会の再選挙をめぐることは、情勢が混乱している。22日に国会は、足切りラインを7%から3%に、供託金を500万ソムから100万ソム（1ソムは約1.3円）に下げ、住民登録した場所以外で投票できる制度を廃止する選挙法案を可決した。これらは、豊富な資金を持つ政党以外でも議席を得られるようにする意味がある。また、憲法的法律の一部を停止し、2021年1月10日までに憲法改革を行った後、遅くとも6月1日までに国会選挙を行うという、選挙延期法案も可決した。これに先立つ10月21日に、中央選管は国会選を12月20日に行うという決定を行っていたが、10月24日に行政裁判所がこの決定を取り消した。27日に中央選管が行政裁判所の決定を不服として行った最高裁への上告も、不透明な理由で受け付けられなかった。中央選管に対しては、警察の家宅捜査などでも繰り返し圧力がかけられていた。

しかし12月20日に選挙を行うための手続はそれまでに進行しており、選挙参加届出の期日である10月24日までに、48の政党が参加を届け出た（ビリムディク党とメケニム・クルグズスタン党は届け出ていない）。26日に改革党が選挙延期法を違憲として起こした訴訟は最高裁判所憲法院で審理される予定であり、また28日にはジャパロフ派以外の旧・反ジェーンベコフ派諸党が連合を組んで12月20日の選挙実施を求めるなど、早期の選挙実施を求める動きは続いている。

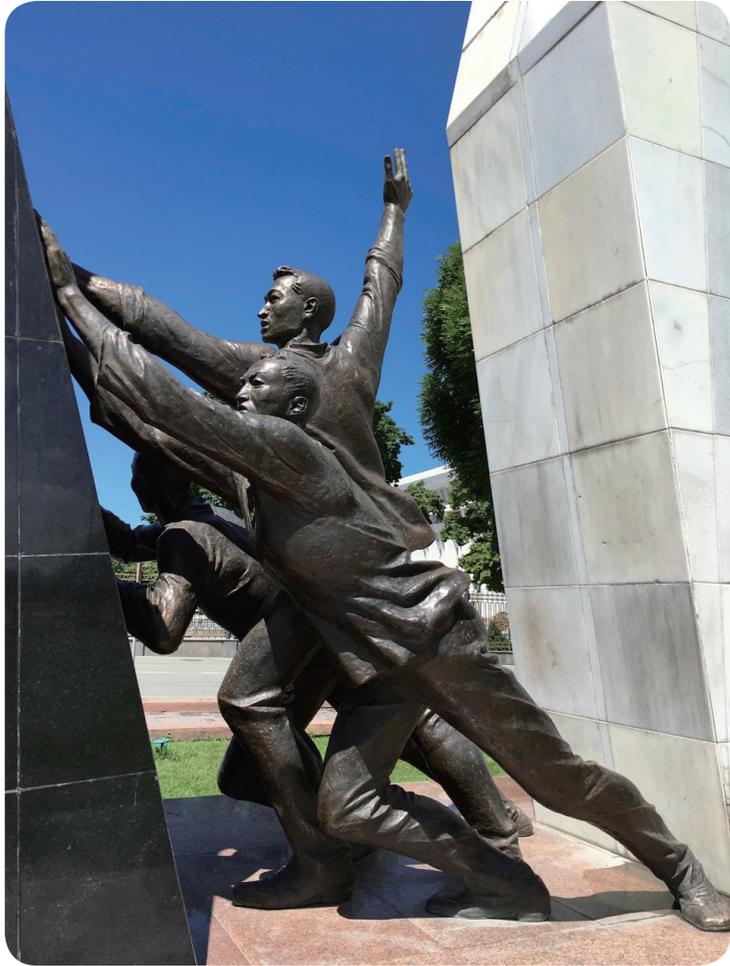
他方大統領選挙に関しては、中央選管の決定の通り、1月10日に行う流れになっているが、選挙延期法と同じ日までに行うとされていた憲法改革との関係がはっきりしない。ジャパロフは、12月初めに大統領代行を辞任したうえで大統領選に出馬すると表明している。彼は大統領に当選したうえで自分に有利な憲法改正を行うつもりではないかという観測も出ている。

#### 4. 政変およびジャパロフ政権の特徴と今後

全体として、今回の事件の性格づけと命名は難しい。2005年と2010年の事件も基本的には権力闘争であり、「革命」と呼ぶことに否定的な見方は多いが、それでもアスカル・アカエフやクルマンベク・バキエフの腐敗した強権政治を倒し、より民主的な政治体制を作ろうという目標はそれなりに広く共有されていた。しかし今回は、マトライモフ家の台頭が嫌悪されたとはいえ、ジェーンベコフに対し強固な反感を持っていたのは、アタムバエフ派や少数の確信的な民主改革派に限られていた。選挙結果に強く抗議したのはまさにアタムバエフ派や民主改革派が中心だったが、すぐにジャパロフ派が主導権を握った。ジェーンベコフがいったん巻き返し、しかしジャパロフ派の集会を排除はせず、集会を背景としたジャパロフの要求によって辞任したものの、アカエフやバキエフのように国外逃亡することなく身の安全を守られたという経緯から見て、ジャパロフ派とジェーンベコフは何らかの取引をした可能性が高い。選挙でいったん勝ったビリムディク党、メケニム・クルグズスタン党、クルグズスタン党などの関係者にとっても、ジャパロフ派はアタムバエフ派や民主改革派よりも受け入れやすかったのだろう。最初に抗議行動を起こしたのに主導権を奪われた人々にとっては、「裏切られた革命」になったと言ってよい。

通俗的には、クルグズスタンの政治は南部と北部の地域対立で動いているという見方があるが、実際には対立構図は個人を核として細分化されていて、政治は数十人の有力政治家たちの力関係で動いていると見る方が適切である。2005年と2010年の事件も、南北対立で説

明できるのはごく一部分である（注1の文献参照）。そして今回、ますます地域対立の要素は薄まった。ジェーンベコフはバキエフと同じく南部（ただし前者はオシュ州、後者はジャララバード州）の出身だが、2010年にバキエフが出身地の南部での支持をあてにして一時再起を図ったものの失敗したのに対し、今回ジェーンベコフを支持する動きは南部でも当初から弱かった。南部出身・北部出身を問わず、これまでジェーンベコフを支持していた政治家の多くは、ジャパロフが実権を握ると簡単に彼になびいた。最後までジェーンベコフ支持を明確に貫いたのは、アイダ・カスマリエヴァ議員、エヴゲニヤ・ストロコヴァ議員（ロシア人）、トルゴナイ・スタマリエヴァ大統領報道官という3人の女性だけであった。



2010年革命の記念碑の一部（2016年5月撮影）

ジャパロフはバキエフ時代に出世した政治家で、北部（イッシク・クリ州の中国国境近く）出身だが、南部出身のタシエフと長くコンビを組んできた。ジャパロフとタシエフは共に民族主義的かつ農村的な政治家で、大衆的な人気があり、特にアタムバエフに迫害されてから、青年層の一部の強固な支持を得た。ジャパロフは「人民の要求」を錦の御旗としてジェーンベコフを辞任させ、実権を握ってからは、人民の名のもとに自分の主張を正当化するポピュリズム的な姿勢をさらに強めている。人気を高めるための手段は汚職取り締まりであり、20日にマトライモフ、22日にマフィアの頭領カムチュ・コルバエフが逮捕されたことは注目を集めた。しかしマトライモフは逮捕当日に保釈され、役所の汚職に関する捜査も頻繁に行われているが恣意的な色彩が強いなど、汚職取り締まりはショーと化している面がある。

ジャパロフはまた、人事交代を頻繁に行っている。一面では、ジャパロフに批判的だった若手政治家のティレク・トクトガジエフを農相に、エリヴィラ・スラバルディエヴァを副首相に登用するなど、幅広い人材を取り込もうという姿勢が見られる（「革命は盗まれた」と言っていたスラバルディエヴァの変わり身の早さは仲間たちを失望させた）。しかしメケンチル党の関係者を優遇する人事や、縁故人事、思いつきの人事も少なくなく、時に反発を買っている。特

に、ビシケク市長や地方、国営企業の人事をめぐる混乱が繰り返し起きた。また少数ではあるが、バキエフと近いと見られる人物が起用されたり、服役期間を短縮して釈放されたりするケースがあり、2010年の革命で闘った人々の間から、バキエフ派の復権を懸念する声が上がっている。

政変の経緯に、憲法・法律の無視が目立つということも指摘しなければならない。イサエフが不可抗力の事情があるわけでもなく大統領代行就任を辞退してジャパロフに譲ったことや、現国会の任期を最大で約7か月延ばすことになる国会選挙の延期が合憲であるか、極めて疑わしい。突発的な混乱で法律の厳密な運用が難しくなった面もなくはないが、クルグズスタンの政治史の全体的な流れとしては、法律が恣意的に変更・解釈・運用されることが、政敵の迫害と、それに対する恨みを原動力とする政変、政変後の混乱、政治の再強権化というサイクルを生んでしまっている。

今後の展開に関しては、国会の再選挙や大統領選挙で誰が勝つかだけでなく、憲法改正がどうなるかが大きな問題である。これまでクルグズスタンでは不完全ながらも議会制民主主義が唱えられ、議会と政党の力を強める改革が行われてきたが、ジャパロフは大統領制の確立と小選挙区制の復活を唱えており、ある意味で独裁志向と言える。今のところ彼は、中核的な支持者を除いては、非常に雑多な人々が暫定的な指導者として担っている存在であり、彼の思い通りになる保証はない。しかし強い大統領制を期待する声は以前から一部の政治家たちの中にあり、権威主義化が進む可能性は決して排除できない。

国際関係の観点から言えば、今回の政変は、ロシアをはじめとする諸外国にとっても予期せぬことだったろう。10月13日にロシアのドミトリー・コザク大統領府副長官が来訪してジェーンベコフおよびジャパロフと会談するなど、ロシアはクルグズスタンの政治家たちと連絡を取り合ってきたが、情勢の展開にはほとんど影響していないと見られる。ロシアとのつながりが極めて深く、中国との経済関係も重要であるというクルグズスタンの基本構図は、政変によっても変わらないはずだが、経済がコロナ禍で弱っているうに政情不安が重なったことで、中国を含む諸外国の投資意欲がさらに下がることも予想される。大統領選・憲法改革・国会選を経て最終的にどのような政権が成立するにしても、国内外の舵取りには困難が待ち受けている。

## 学 界 短 信

### ◆ ロシア・東欧学会オンライン大会が北大で開催される ◆

ロシア・東欧学会の第49回研究大会が10月17～18日に北大で開催されました。北大での開催は2004年以来ですが、新型コロナウイルスの影響により、オンラインでの開催となってしまいました。センターは共催者となったほか、同学会の代表理事を務める田畑が大会組織委員長、宇山教授が企画委員長を務めるなど、センターの教員が大会運営面で大きく貢献しました。Zoomでの開催となりましたが、センター若手教員の手慣れた運営により、それに起因するようなトラブルはなかったように思いました。事前に参加登録をされた方の数は約150人、実際に100人以上の方が参加されました。

今年の大会の共通論題は「ロシア、中央ユーラシア、東欧と日本の交流関係」とされ、歴史編と現在編の2つのセッションが開かれ、6つの報告がなされました。そのなかにはセンターの岩下教授による報告もありました。共通論題として、スラブ・ユーラシア地域と日本との交流関係を取り上げたことは、少なくとも最近はなかったと思われることから、意義のある試みになったと思います。自由論題においても、北大文学院スラブ・ユーラシア学講座の院

生3名が報告するなど、北大関係者が大いに活躍しました。

大会に合わせて開かれる会員総会や理事会もオンラインでの開催となりました。総会では、理事の数を大幅に減らす方向での役員選出規程の改正がなされました。来年度の大会は大阪大学で開かれる予定です。[田畑]

### ◆ 学会カレンダー ◆

- 2020年11月21日 地域研究コンソーシアム2020年度年次集会・一般公開シンポジウム  
オンライン開催 <http://www.jcas.jp/about/nenji.html>
- 11月28-29日 第60回比較経済体制学会全国大会 オンライン開催  
<http://www.jaces.info/info.html>
- 2021年3月20-21日 2020年度日本中央アジア学会年次大会 オンライン開催  
<http://www.jacas.jp>
- 5月6-8日 25th Annual World Convention of the Association for the Study of Nationalities (ASN) オンライン開催  
<https://nationalities.org/convention/2021-convention>
- 8月3-8日 ICCEES第10回大会 於モントリオール <http://iccees.org/>

前号掲載の学会行事のうち、本年10～11月のロシア・東欧学会2020年度研究大会、2020年度内陸アジア史学会大会、日本ロシア文学会2020年度全国大会、52nd Annual ASEEEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Convention、ロシア史研究会2020年度大会は、いずれもオンライン開催となりました。[編集部]

## 図書室だより

### ◆ CD音声データ消失事件 ◆

2019年夏のある日、音声CD資料が再生できない事件が起こりました。これは、ロシア科学アカデミーが採集した少数民族のフォークロアを収録し、アメリカで発売されたシリーズに含まれるもので、センターでは2010年に購入したものです。

調べてみますと、CDそのものが変質したせいか、外見は普通ですがPCから認識することができません。シリーズの全部がそうなったわけではなく、認識できるCDと問題なく使えるCDが同じシリーズの中に混在することがわかりました。

なお、本学附属図書館本館も、同じシリーズを所蔵しています。早速問い合わせしてみたところ、請求のあった資料は、残念ながらこちらで利用不能とわかりました。ただし、こちらでもシリーズの中で利用可能のものと同様のものが混じっていて、利用できない部分がセンターとは一致していませんでした。

ここで、納入した書店に連絡し、利用不能の対応を相談したところ、2ヶ月弱で新しい製品と交換していただくことができました。

CDやDVDは、記録媒体として必ずしも安定しておらず、データが消えてしまうことがあるという知識はありましたが、実際に遭遇したのはこれが初めてです。外見上はまったくわからず、実際に機械にかけてみないとわからないのが、面倒なところです。信頼できるバックアップを取るか、定期的に点検する以外に対策はないのでしょうか。みなさまもどうぞご注意ください。[兔内]

### ◆ センター図書室のコロナ対応 ◆

センター図書室は、新型コロナウイルス感染症対策として、一部に在宅勤務を導入した関係で、本年4月21日以降開室時間を短縮し、平日の10時から15時までとしております（平時は9時から17時まで）。しばらくご不便をかけますが、ご了解ください。

なお、北大附属図書館が学外者の利用制限を続けている関係で、この10月より、マイクロ資料についてILLの数量制限を緩和しています。現在、フィルムについては一度に4巻まで、フィッシュは60シート前後まで（平時はそれぞれ2巻までと30シート前後まで）としております。[兎内]

### ◆ 「シベリア・極東所蔵資料ギャラリー」コンテンツの追加 ◆

図書室は、所蔵するユニークな地図・写真資料を中心に紹介するウェブサイト「シベリア・極東所蔵資料ギャラリー」を運用していますが、この11月、シベリア出兵関係の写真帖を中心に、いくつかのコンテンツを追加しましたので、お知らせします。

#### ①『第七師団西伯利亚出征凱旋記念写真帖』（旭川、1919年）（資料番号：1380795157）

旭川を本拠とする第七師団は、1918年8月に開始されたシベリア出兵の一翼をになってザバイカル、北部満州および沿海州で活動し、1919年4～5月に帰還しました。この写真帖は、現地での活動ではなく、函館に上陸して旭川・札幌に帰還・凱旋した状況を収めたものですが、当時の軍の施設や町並み、軍と地域社会との関わりを窺うことができます。

#### ②『西伯利亚派遣軍記念写真帖』（旅順、1920年）

シベリア出兵のほぼ折り返し点に当たる1920年に、派遣軍が活動・駐留した各地を撮影した写真帖で、ウラジオストク、ハバロフスク、ポグラニーチナヤ、ハルビン、満州里、チタなどの状況を収めています。

#### ③『歩兵第二連隊西伯比出征記念写真帖』（ニコリスク、1921年）

水戸に駐留した歩兵第二連隊は、宇都宮を本拠とする第十四師団に所属し、1919年4月に同師団の他の部隊とともにシベリア出兵に動員され、アムール州東部、沿海州ハバロフスク郡、およびニコラエフスクに駐兵しました。このニコラエフスクに駐兵した歩兵第三大隊が、1920年3～5月のニコラエフスク事件によって全滅したことは、出兵中の大事件としてよく知られています。この少し前の1920年2月、歩兵第二連隊を含む第十四師団は現地情勢の変化によりアムール州から撤退してハバロフスクに入り、1920年4月初めには、沿海州で生じた革命派との武力衝突の一翼をになってハバロフスクを中心に戦闘を展開し、革命派を西に追い出しました。アムール河の鉄橋が破壊されたのは、この時のことです。同年10月、部隊はハバロフスクから撤収すると、ウラジオストクで乗船して広島に上陸し、1920年11月に水戸に帰還しました。

#### ④『西伯利亚派遣軍記念写真帖』（歩兵第十七連隊将校団撮影、東京、1923年）

平時は秋田に駐留した歩兵第十七連隊は、第八師団（弘前）に所属します。1921年12月にシベリア派遣を命じられ、同年暮れに青森で乗船し、1922年初めにウラジオストク入りしました。当初は第十一師団（善通寺）師団長の指揮下に入りましたが、同年5月に第八師団本体が沿海州に到着すると、第九師団と交代して配置に付き、10月にここを撤収して青森港に上陸、11月に復員を完了しました。

この写真帖は、シベリア出兵の最終段階の、主にニコリスクとウラジオストクの状況を記録したもので、市街の日常や、軍事施設、当時流通した紙幣の画像まで収録されています。

以上で、このウェブサイトに収録したシベリア出兵関係写真帖は6点となりましたが、センターと北大附属図書館には、まだ多数のシベリア出兵関係写真帖がありますので、今後も機会を見て、データを追加していきたいと考えています。

今回は、このほか、『哈爾濱市街地図』（大連、1913年）（資料番号：1380404222）、『大連市街図』（大連、1921年）（資料番号：1380743974）、および「樺太全図」（『樺太の産業と港湾』（小樽、1936年）付録図）（本館北方資料、資料番号：0012727836）を追加しました。

図書室では、今後も機会をとらえて、地域研究に役立つデータ・画像の公開を進めてきたいと考えています。[兎内]

## 編集室だより

### ◆ ACTA SLAVICA IAPONICA ◆

前号に続き発行が遅れていた41号ですが、11月にやっと刊行されました。論文6本、書評3本ということで、40号の半分程度の厚さになりましたが、これが通常の姿かと思えます。無論、掲載されたものはいずれも力作です。内容につきましては、センターサイトの該当箇所 (<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publictn/acta/41/index.html>) をご覧ください。現在は42号の編集作業を進めております。今回は論文8本と書評2本が投稿されました。年々投稿が減っているのが気がかりです。43号の締め切りは2021年7月18日ですので、ふるってご投稿ください。[野町]

### ◆ 『スラヴ研究』 ◆

『スラヴ研究』は8月末で投稿を締め切りましたが、例年になく投稿数に乏しく、11月末まで締め切りを延期しました。この間に査読に回せるものは、依頼をしています。[長縄]

## 会議（2020年7月～9月）

### ◆ センター協議委員会 ◆

2020年度第4回7月6日（月）[オンライン開催]

- 議題
1. 令和元年度支出予算決算（案）について
  2. 令和2年度支出予算配当（案）について
  3. 大学間交流協定の締結について
  4. 部局間交流協定の締結について
  5. 部局間交流協定の更新について
  6. 研究生の受入（新規）について

2020年度第5回9月15日（火）～24日（木）[メール開催]

- 議題
1. 部局間交流協定の締結について

### ◆ センター共同利用・共同研究拠点運営委員会 ◆

2020年度第1回7月25日（水）[オンライン開催]

- 議題
1. 共同利用・共同研究拠点の活動について
  2. 共同利用・共同研究公募のあり方について
  3. スラブ・ユーラシア研究センター共同研究員の選考について

2020年度第2回10月9日（金）～16日（金）[メール開催]

- 議題
1. 百瀬フェローシップ（仮称）の新設について
  2. 実社会共創セミナーの新設及びメーリングリストの立ち上げについて [事務係]

## 目 次

研究の最前線.....	1
2020年度夏期国際シンポジウム《北東アジア——歴史と未来・発展と摩擦》開催される／専任研究員セミナー／研究会活動	
人事の動き.....	4
青島陽子さんの着任／研究員の異動	
平穏さに触れた4カ月.....	5
by ヘンナディー・コロリョフ	
環境と社会のあいだ：ワークショップ「前近代ユーラシア東西における気候変動と社会」報告記.....	8
by 諫早庸一	
人民の要求か、裏切られた革命か：クルグズスタン（キルギス）の2020年政変.....	11
by 宇山智彦	
学界短信.....	16
ロシア・東欧学会オンライン大会が北大で開催される／学会カレンダー	
図書室だより.....	17
CD音声データ消失事件／センター図書室のコロナ対応／「シベリア・極東所蔵資料ギャラリー」コンテンツの追加	
編集室だより.....	19
ACTA SLAVICA IAPONICA / 『スラヴ研究』	
会議（2020年7～9月）.....	19
センター協議委員会／センター共同利用・共同研究拠点運営委員会	

---

2020年11月30日発行

編集責任	大須賀みか
編集協力	宇山智彦
発行者	岩下明裕
発行所	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 060-0809 札幌市北区北9条西7丁目 Tel.011-706-3156、706-2388 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： <a href="http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/">http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/</a>

---